保険毎日新聞「みちくさ保険物語」027

戦前の保険会社の年賀状―どんな保険会社が年賀状を出したのか？－

毎回連載を読んでいただく読者の皆様に、新年のご挨拶をこめて戦前の保険会社の年賀状を紹介します。少し遅いかもしれませんが、お許しください。収集した保険会社の絵葉書を分析すると、年賀状を残している会社の特徴が二つ浮かび上がってくる。一つ目は、損保会社の年賀状はほとんどみられないこと。そして二つ目は、大手生保よりも中小生保に多くの年賀状が残っていることだ。

これらの特徴が生じた理由としては、次のようなことが考えられる。損保会社については、損保商品の保険期間は 1 年である場合が多く、年賀状のタイミングのご挨拶よりも契約更新の際のご挨拶の方がはるかに重要であることだ。生保会社については、次のような事情が推測される。大手生保会社は、契約数が多いこともあり、支社レベルあるいは募集人による新年の挨拶が重視されていたのではないかということ。これに対して中小生保の場合には、保有契約数が多くなかったため、支社や募集人に代わって、本社が直接に新年のご挨拶を行うという慣行があったのではなかったかと考えられる。たしかに、私が所蔵する絵葉書資料には、支店名で出している大手生保の年賀状が残っている。

はじめに掲載した年賀状は大正生命の年賀状である。大正 3 年は寅年なので中央に唐獅子が配置されている。同社の社長と本社も描かれている。大正生命は、当連載の第 3 回で紹介したように近代日本のグラフィック・デザイナーの先駆けといわれている杉浦非水がデザインした年賀状を採用していたが、大正 3 年のものが非水によるデザインかどうかは定かではない。

次に掲載した年賀状は、幼い子供たちを配したほほえましい図柄である。日章旗やバンザイと書かれているが、大正期のものなので戦時期のものと違って好戦的な雰囲気は感じではない。万歳生命については、連載第 23 回に紹介したが、一橋大学の前身である東京高等商業の卒業生が中心となって設立された会社だ。この年賀状には、同校の同窓会である如水会の第 3 代理事長をつとめた藤村義苗をはじめとして太田黒重五郎などの OB の名前がみられる。ちなみに大正 7 年は午年である。

次は大安生命の昭和 3 年の年賀状だ。同社は大正 2 年に設立された零細生保。同社は、「元正金の重役だった故木村利右衛門翁が 79 歳の老後に於いて社会奉仕の為と云って作られた」（稲見泰治『保険はどこへ』文雅堂、1926 年、114 頁）ものであり、昭和元年には利右衛門翁の養子の木村庫之助が取締役社長であった。しかしこの年賀状では、経営権が移動して、橋本萬右衛門という人物が社長となっている。また年賀状の文面には、弊社更生の第 1 年たる昨年度はお蔭をもって前年度に比し 1.5 倍あまりの新契約を獲得し、社礎いよいよ強固となった旨が記されている。同社はその後、新経営陣の更正努力もむなしく、昭和 8 年に片倉生命に吸収合併されている。

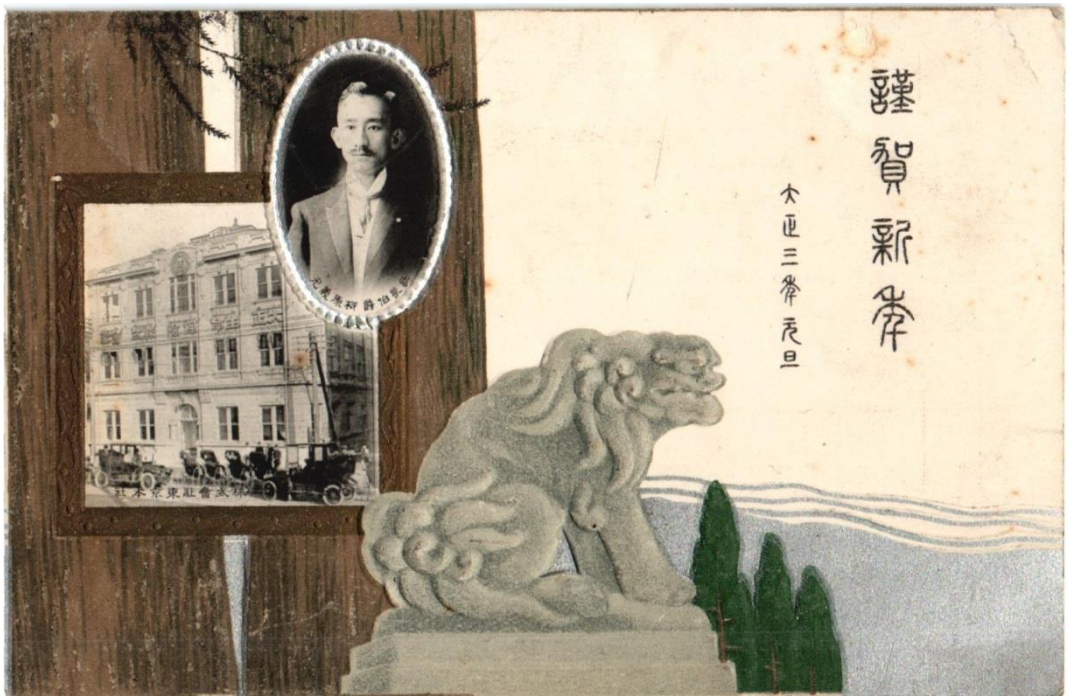
次の年賀状は宝船という縁起のよい図柄である。福寿生命が昭和 7 年のお正月に契約者に送ったもの。昭和 7 年は今年と同じ申年であるが、猿は見当たらない。しかし宝船の背

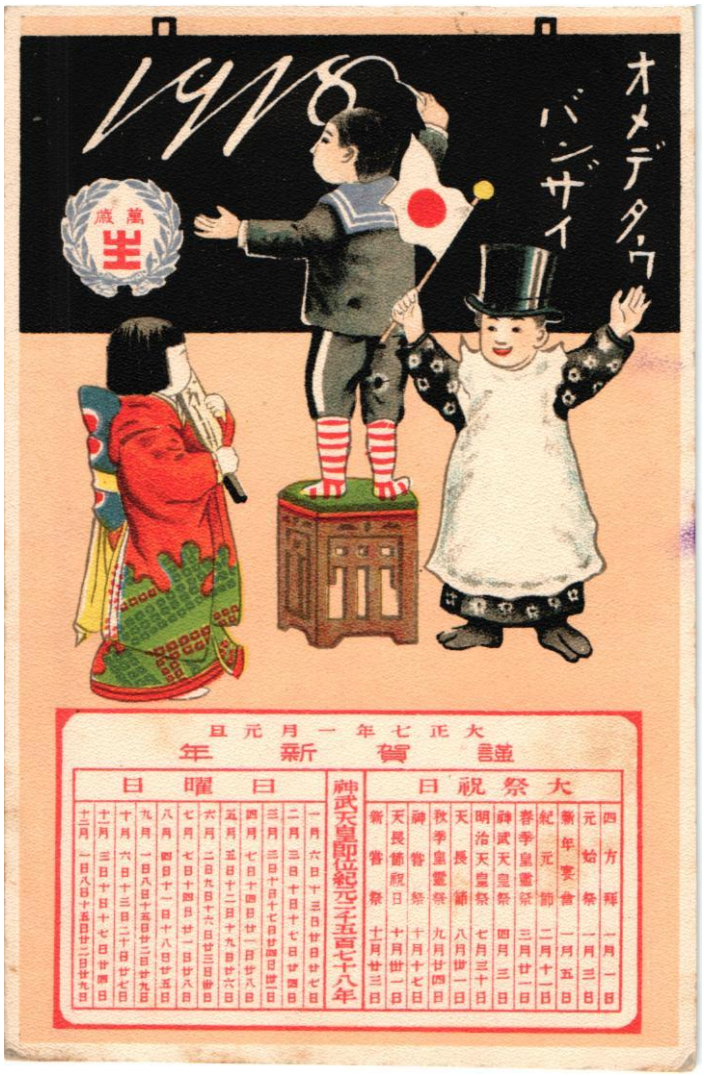
後には猿がすむような高い山が聳えている。福寿生命は、明治 41 年 10 月に設立された会社で、名古屋市に本社を置いて中京を基盤とした堅実な経営を続けていたが、昭和 16 年に明治生命に合併され、同社の契約は翌年に明治生命に包括移転された。

次は夫婦岩を絵柄にした謹賀新年の典型のような年賀状だが、日本医師共済生命による昭和 8 年元旦のものである。同社は他の中小相互会社 4 社と合併して、翌年に昭和生命となるが、営業は思うように進展せず、昭和 16 年に第一生命に包括移転された。

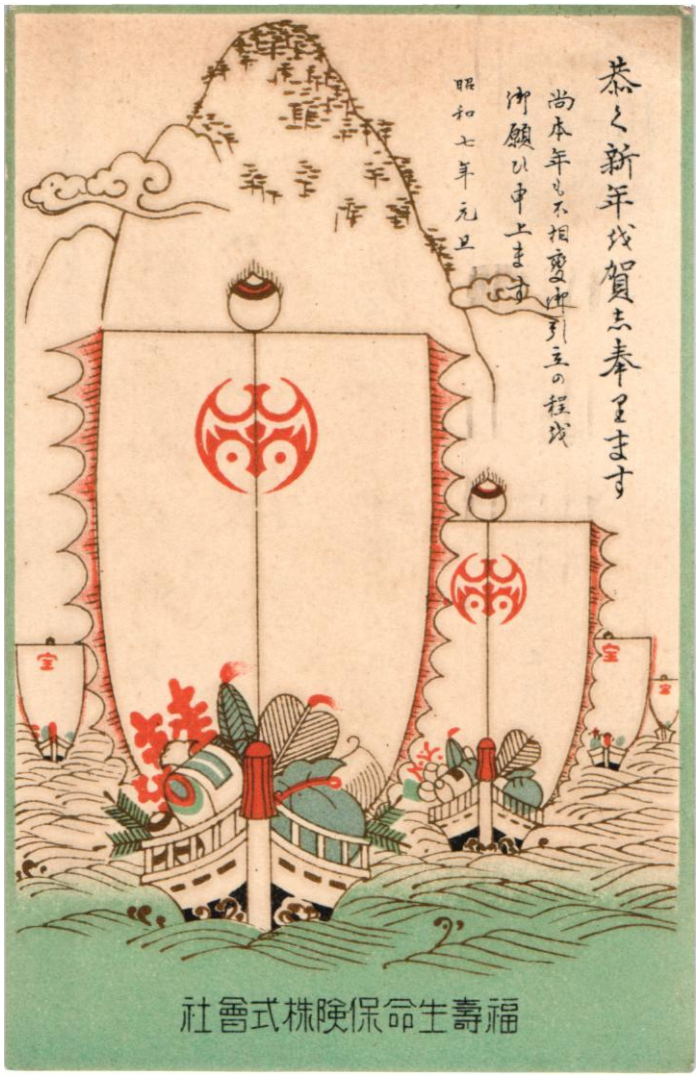
最後の昭和 9 年の年賀状には、やや風変わりな建物が登場する。これは日本簡易火災保険の本社社屋である。日本簡易火災保険は、富士火災の前身会社で、戦前は東京動産（大日本火災の前身）、日本動産（日動火災の前身）と並んで、戦前において「動産三社」と呼ばれていた、月掛の小口火災保険を販売していた保険会社である。損保会社であるにもかかわらず、年賀状が残っているのは、月掛小口火災保険という商品性から、個人物件が多く、通常の損害保険会社と比べて、個人顧客とのつながりが個人的なものであったためでかもしれない。同社は大阪に本社を置き、関西を中心に強固な営業基盤を築いていたが、戦後は、普通火災保険会社に転じ富士火災と社名を変更した。近年は AIG グループとの関係を深めていることは周知のことであろう。動産会社は戦時経済との関係が特に強いというものではないが、本社の建物を見ると、軍艦様式といいたくなるような戦時色の濃い外観となっている。この頃から昭和のお正月が、戦争によって緊迫したものとなってきたようである。

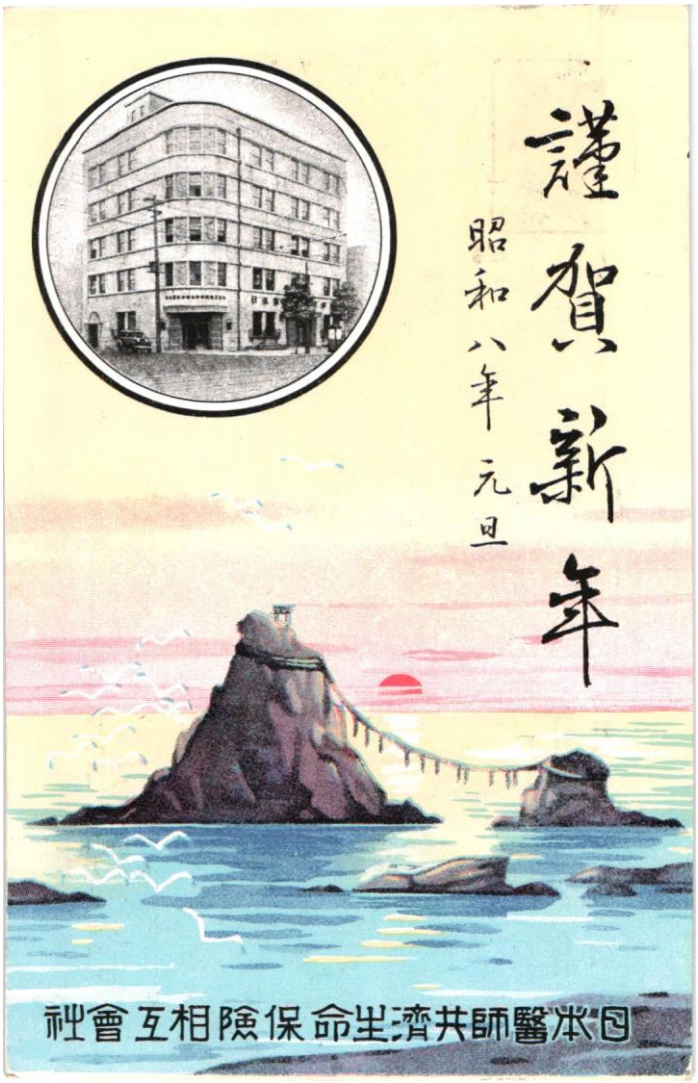
今年の申年が平和な一年になりますように心から祈念して、新年のご挨拶とさせていたく。今年もご愛読をよろしくお願い申し上げます。


謹賀新年
大正三年元旦


1918
萬歳
生
オメデタウ
バンザイ
大正七年一月元旦
謹賀新年
大祭祝日
四方拜 一月一日
元始祭 一月三日
新年宴會 一月五日
紀元節 二月十一日
春季皇靈祭 三月廿一日
神武天皇祭 四月三日
明治天皇祭 七月三十日
天長節 八月廿一日
秋季皇靈祭 九月廿四日
神嘗祭 十月十七日
天長節祝日 十月廿一日
新嘗祭 十月廿三日
神武天皇即位紀元二千五百七十八年
日曜日
一月六日十三日廿日廿七日
二月三日十日十七日廿四日
三月三日十日十七日廿四日廿一日
四月七日十四日廿一日廿八日
五月五日十二日十九日廿六日
六月二日九日十六日廿三日廿九日
七月七日十四日廿一日廿八日
八月四日十一日十八日廿五日
九月一日八日十五日廿二日廿九日
十月六日十三日二十日廿七日
十一月三日十日十七日廿四日
十二月一日八日十五日廿二日廿九日

TAIAN
安
賀正
昭和參年一月元旦
大安生命保險株式會社
社長 橋本萬右衛門
專務取締役 川村鉀次郎
支配人 中村文四郎
弊社更生の第一年たる昨年度は以御蔭前年度に比し拾五割餘の新契約を獲社礎愈々鞏固を加へ候段感謝に不堪候本年度は一層奮勵努力益々發展の度を進め度く候間何卒倍舊の御援助奉願候
敬具


恭く新年祝賀志奉ります
昭和七年元旦
福壽生命保険株式會社


謹賀新年
昭和八年元旦
日本醫師共濟生命保險相互會社

謹賀新年
昭和九年元旦
日本帝國火災保險
（社　本）